

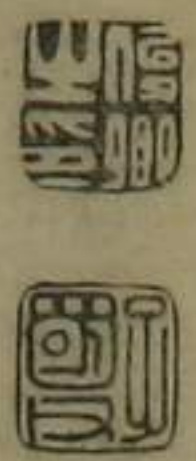
役丁夫一里一亭三里一舍肩之以送踵之
以迎勞可以逸饑可以飽又曰導海舶
於鮑子口運諸印幡沿鑿地為渠通
諸檢見川達諸江戶海可以免東海風
濤之險且沿之近徭可以墾種然亦有四
難曰人力乏也苟多役之則徒為煩冗用
帑難給曰淤泥多也旋掘旋壅曰沙土
鬆也旋積旋崩曰西風烈也歲颶沙

下流以壅則檢見川之將有後累也然
此數事皆有善處之法苟有能者將
不難云又曰斷庶島之沙丘於其窳狹
之處則利根川之水落於庶島浦乃
通溝渠於十二橋墾田園於十六島凡
此數者皆係利根川之事吾生其徭
不能無感姑記其所聞見以為此書
而如夫數策則興感之曰以冠篇首

其是非則吾所不知故文中不及也且
吾素乏學饒有毀譽亦何管焉出門
一笑大江橫

安政二年乙卯季春 赤松義知識

雪城居士後卿書



凡例

この書題して利根川圖志といふ時ハその本源の方より記すべ
き事わざあれどそハ余が郷里よりハ遠く隔りへる境さきにて考察の便
ありけれバこゝこゝびハ上利根川の下ある房川渡以下赤堀川權現
堂川と分れへる處より筆を起し中下利根川及びそれを流れ入る
手賀沼印幡沼等を始神社佛閣名所舊迹物産を記し銚子浦を終
るその間記載せすべき者甚多し脱漏だつろう亦少くかりず故に拾遺しゆゐの舉あり
り以てこれを収きめむとす希にハハこの書を看む人各々その家こゝ標こゝ
舊記及び考説詩歌等を齎もたらへ來て余が不足を補ひ不到たうを正ただしめ
ハむ事を而して上利根川の方亦繼て筆を起さむとすその考察
不た於てハ亦上武諸哲てつの教を期まつ
編中載する所鹿島香取の如き素より大社なりしてその典故極め
て多し且前に北條時鄰鹿島志小林重規香取志あり又佐原の聞

人伊能穎則が年頃香取の舊記故實を正さむの志あれば大率これに譲りてその繁畧を識す又守谷將門山等ふる將門の古記事實ハ佐原人清宮氏年頃考索して己上木せむとするの聞あれバこの一事ハ彼に譲り又上利根川分流一終東南して江戸川と爲る方ハ余が友君塚玄圃下總國千葉郡五田保人年頃房總邊圖志編述の志あれバこの一方ハ此に譲りて畧きぬ他日數書成るの後相照して可かりこの餘記載すべき事多く物産亦少からず今故不これに脱せる者あり而して又細故俚事を収むる者ハ睡魔を驅るの用のこ

近來の著書或ハ引用書目を多く一以て該博を示す然れどもその實ハ以て秋を觀す者あり夫古事記日本書紀等の國史萬葉集古今集等の歌書新撰字鏡倭名鈔等ハ諸書の通引書とすべし又惣國風土記この書世不偽撰とへふれども今ハ伴信友が後三國條院天皇の御時と考へるに因りて記す

名風土記人國記等の全國を記せるハ雲御抄名所類字和歌集歌枕名寄等の歌枕を識せる延喜神名式諸國一官記本朝神社考神社啓蒙の神社を録せる諸國主齋録の官寺を擧げたる主圖合結廢城考の城砦を載せたる行囊鈔の行路を紀せる諸州株檠記物類品隲の物産を説へる諸國名義考の名義を考へたる物類稱呼の方言を聚めたるこの餘雲根志の石品鐘銘集の鐘銘集古十種の古物農具便利論の農具前王陵廟記墓所一覽の陵墓諸國里人談の奇談皆地志の材料ありぬハ無し而して今こゝに主たる書ハ地志ハ常陸風土記西野宣明訂正本の跋に常陸國志三卷水佐倉風土記一卷享保七年和銅年間の書といへり常陸國志三卷水佐倉風土記寅磯邊昌言著總葉繁録二卷正徳五年鹿島志二卷文政六年香取志二卷天保四年潮來圖誌二卷天保十年木曾海道名所圖會五秋里藤島己本曾路を記して四卷不盡卷五波山不詣り千住大橋金山龍山不到る蓋その紀行あり

凡例

二

大須本 鹿島治亂記 堀本 永六年 暮春 漂泊 關東古戦録 四十卷
 本あり 傳を校正せし 猶考ふべし 又別考同作あり 自序不享保丙午
 著關侍旦と有れど 浪人某下總國相馬郡河原村に居て著せる
 神説 東國戦記 賀元祿年間 作といふ 伊能則曰 此の書あり 下妻多
 あり 東國戦記 賀元祿年間 作といふ 伊能則曰 此の書あり 下妻多
 所あり 一本 廿五卷 浪人某下總國相馬郡河原村に居て著せる
 り 東野遺史 關前松好庵明和年間 著 紀行 八東遊行囊鈔 卷十八 自序
 一 丙子歳八月 下旬 飛國浪士 江間氏親と有り 行囊鈔 全部 百十
 を分つ 別不遊 囊鈔 記あり 凡 紀行 備 二 書 南 路 東 遊 記 西 遊 記 鹿 島
 百 井 塘 雨 爰 埃 隨 筆 等 多 一 凡 紀 行 備 二 書 南 路 東 遊 記 西 遊 記 鹿 島
 紀 行 貞 享 三 年 丁 卯 芭 蕉 翁 後 編 一 載 之 鹿 島 海 道 記 一 卷 寛 政 六 年 甲 寅 橋 本 千
 作 鹿 島 道 記 一 卷 仙 臺 永 八 年 己 未 香 取 日 記 一 卷 春 海 崎 相 馬 日 記 四 卷 文 刻
 て 二 種 日 記 二 卷 清 水 常 陸 紀 行 二 卷 黒 崎 相 馬 日 記 四 卷 文 刻
 記 二 種 日 記 二 卷 清 水 常 陸 紀 行 二 卷 黒 崎 相 馬 日 記 四 卷 文 刻
 年 丁 丑 高 鹿 島 日 記 一 卷 文 政 五 年 壬 午 高 田 與 清 著 此 外 十 四
 田 與 清 著 鹿 島 日 記 一 卷 文 政 五 年 壬 午 高 田 與 清 著 此 外 十 四
 未 見 航 湖 紀 勝 一 卷 藤 森 弘 菴 著 此 外 十 四
 家 集 二 卷 四 家 八 年 士 子 伊 能 頴 則 撰 び て 鶴 祥 十 勸 善 録 田 三 卷 高

著或ハ首きて二巻と
 一常總夜話と名づく等ありこの他千葉白井等の譜牒ケイゾウの縁
 起下總常陸及び手賀沼印播沼等の地圖等援據する所數ふふ小
 違あらず又巻中載する所詩歌等古今人の集ふ取る事少からず
 煩を畏れてこゝ小擧げず
 利根川全圖の如き巻中書流したれば曲直方位を正す事あ
 たはず多々地名探索のためふ其繁畧を識すのそ
 巻中の画圖名印無きハ葛飾北齋あり

- 國名
- 郡名
- 國界
- 郡界
- 城
- 陳屋
- 驛市
- 村
- 分郷
- 新田
- 竹園所
- 道路
- 戸宮社
- 台佛寺
- 名所舊跡
- 故城
- △ 温泉
- △ 竹堰
- △ 目橋

○ 總圖



下總國

馬場郡

馬場郡

猿島郡

渡頼川は源野の尾
時後神子内渡良邊に
出づ桐生川佐野川思川
等を併せ武野三州の
界を為して利根川に合
す



馬場郡

馬場郡

見沼用水は東南を流れて星川と爲り
通る等馬場の地を潤し南に下りて
足立郡見沼に入り川に至り荒川に
合す而て本流の東南に向き荒川
荒川を合し右馬場の地を潤し上り
袋利川に合し其谷の南に下り住吉
を横きり南に流れて鶴田川に入る
して一派は岩槻城より直に東に流
れて中川に合し南に下りて海に入る

見沼用水

見沼用水



一 海圖

六

行方部

印幡沼

子大

海田部



鉦子口廣町許宜東北風若風坤
 來舟入不易
 鉦子口ヨリ佐原マノ十里ヨリ小塚
 河口マノ十里
 鉦子ヨリ舟路
 常陸國府中マノ五里許
 去浦マノ二七里二十四町
 常陸マノ三十八里
 那珂馬マノ三千里
 安房國小湊マノ八里
 鉦子ヨリ舟路
 常陸國府中マノ五里許
 去浦マノ二七里二十四町
 常陸マノ三十八里
 那珂馬マノ三千里
 安房國小湊マノ八里



香取郡
 海上郡

南高郡

浦島兜

邊之山草木之

三中央圖

下野 沼田 高野 川頭 高野 川頭 高野 川頭
 長野 古内 志高 長野 古内 志高
 香取郡 海上郡 南高郡 浦島兜
 鉦子 佐原 小塚 河口 鉦子 佐原 小塚 河口
 常陸國府中 去浦 常陸 那珂馬 安房國小湊

上利根川
餘五橋圖
在上州沼田
以藤原正國畫寫之



利根川圖志卷一

下總 布川 赤松宗旦 義知 著

總論

利根川は本源を上野國利根郡藤原の奥なる文殊山に發す義經
 三頼朝謀叛事餘不隅田川の事を言ふと此の河の水は上野
 國利根郡藤原と此の川を言へり落ちて水上遠く此の河の水は
 沿革有れば此の川を言へり又江戶名所圖會武藏演路共
 に文殊嶽より出で直る川を言へり此の川を言へり又江戶名所
 の脈故に郡名を以て直る川名とす利根郡の名は延喜部式に
 ありといへり上州名跡考に利根ハ夫利根郡の名は延喜部式に
 ケレバ利根ノ義ナルベシと見ゆ猶考ふべし多刀祢と書きさる
 は固より假字にて義あるに非ず此の川志か上野より出て
 るが上に古書に言へる所大率上野の方なれば其の方より筆を
 起すべき理をれど余が郷里近き邊の事ども年頃耳目及み限
 書集めて持るを空やハヒ人の誘めより如此筆を起す事と
 爲りし故にて猶その源の方ハつきるものすべき事にむ然

總論



この餘近世人の詩歌最多大率江戸川の吟あり故に
君塚巖が房總海邊圖志に譲りこゝに一首を擧ぐ
夕立や浪を研流す刀祿の音

坂東の一番蛙や太市河
輕舟
水樹

運輸

夫舟楫の利ハ以て不通を濟する物あれば天下の利器これより
便あるハ無一これ河海の大よ人益ある故あり利根川に在て
ハ專航船を用う三代實録卷四十六元慶八年甲辰九月條に十六
長三丈一尺廣五尺二艘長二丈一尺廣二尺二艘長二丈廣二尺二艘
神泉苑と見之曰渠容及古事今案和名抄卷十一俗用高瀬船
艇小而深者曰艇渠容及古事今案和名抄卷十一俗用高瀬船
と見之曰渠容及古事今案和名抄卷十一俗用高瀬船
言卷九の字當此又和漢三才圖會卷三十四は天船あり
高タカクおのり高瀬船ハ深かり因りて想ふ年ごりこハ今
三才圖會卷三十四は二艘俗用高瀬船今舟形稍異接京河原流至伏
見呼曰高瀬川其船長二丈餘似船と見之れる見て米五六百俵
考ふべし尚高瀬舟の事諸書に見えれど磨きぬ米五六百俵
二斗を積む者常あり舟子四人を以てすその大なる者ハ八九百

俵を積む舟子六人を以てす百俵積以下をバウテウ釋名卷七以下
日艇艇也其形徑挺一人二人所乘行者也といへる和漢度量の
差あれどこの字當此又和漢三才圖會卷三十四は天船あり
物ありといふ急事の備あり舟子一人を以てす公用の船を御用
船といひ諸侯の御手船を御船といひ他の船を以て貢米を運送
するを御雇船といふ雇船あり御船の他ハ賣船あり運賃ハ米百俵
の重を百匁と一薪材をもこれに准へて百匁銀若干といふ猶
遠近に因て差あり薪材の重ハ船の喫水先銚子口より關宿に上
りそれより江戸に下るを利根の直船といふ荷物ハ大槩乾鱈魚
油あり常陸の北浦西浦より出づるハ米穀炭薪材木等あり印幡
沼衣川上利根川亦同一長沼手賀沼ハ入樋ありて船入りす蠶養
川ハ大率竹筏多御用の外ハ舟人字一川盗といふ船を御雇の
三入るあり考ふべしこれらの諸物を江戸に輸し更に鹽等を
積みて各處に歸る此の如く諸州の通船一處に湊會して布帆は

白鷺の往返するが如く釣艇ハ緑鴨の來去するに似たり實に利
根川第一の眺望あり
水涸れて河身高き時ハ航船通せず故に脚船を以て運送すこれ
を觸下船といひ觸ハ俗これを業とする家を觸下宿といふ又舟
子少き時或ハ洪水逢へバ土人を雇ふこれを業とする家を引
付宿といふ共に處々に在り
銚子浦より鮮魚を積上するを鱸船といふ舟子三人まで日暮
は彼處を出て夜間二十里餘の水路を洩り未明は布佐布川よ
至る特この處を多しとす故にその賑他處は倍一人聲喧雜肩摩
踵接傾くる魚は銀刀を閃し鉛錘を投し桃花を散し箬葉を
翻して一時の佳景と稱するは足れり而して冬ハ布佐より馬
駄して松戸通よりこれを江戸に輸り夏ハ活舟を以て關宿を経
て日本橋に到る以て小民市人の饒を愈し以て公子王孫の榮を

を博む又常陸の鹿島浦より來る鱸船希ふ有り又あまりふし乾
魚は舢舨ふて輸るあり

天候

舟人の最慎む所ハ天候にして就中暴風を前知するふあり而し
て迅く帆を下け苦を覆はざれば或ハチノモノ沈木の方言あり
三秀才洞庭湖の楠木神と不乗りりけマン子川岸の邊をいふ
不抵りて舟を損ト舵を断え若ハ人命を殘ふに至るを以てあり
故に練熟の舟人ハ掌を知る
黒雲急不起るハその方より暴風來る微あり曉し黒雲奇峯を爲
すハその方不風行くあり東南風ハ晴ふて西北風ハ雨あり然れ
ども時節不因て差あり
日光山よく晴れたるハ北西風あり北西風又ヤマデヒハ日曇
りたるハ雨微あり筑波山よく晴れたるハ北東風あり筑波オロ

天候



布川魚市之光景



雨日ハ晴微トす富士山ハ黒雲あれば西南風ありこれをフジ
南西風ハフジ曇天ハ富士山の晴れると西南風あり
鳥飛下るハ必風ハ向ハ是を以て風の方向を知る

魚高く跳るハ雨低きハ晴あり
耳痒きハ晴の微あり
星光揺くハ大風の微あり

天經或問云夜星燦躍參星動搖太白晨見此皆風微或繼之雨也

この參星ハ二十八宿の中にて尤見易き者かれハ舟人これを認
めて準とす故ハ方言多ク物類稱呼卷一ハ參ハ二十八宿の内
ハ中星の横ハ連りたる三の星を江戸にて三光といひ又三星と
いハ關西にて親荷星といハ東國にて三ちやうの星と呼ハ今按
所の音武藏國葛西にてさむろ不といハといハ上原氏藻汐
草ハ蝦夷方言を記してヲガンチといハるも是あり

參星ハ續きて準とする者ハ昴宿あり物類稱呼ハ昴ハ二十八

宿の内東國にて九曜星といハ江戸にてハ六連星といハといハ

り蝦夷にてハイロシリコフといハ

太白星ハ宵の明星蝦夷にてキンマチスルクルといハる方長庚

ハ一て曉の明星ニシヤツシヤヲチといハるハ啓明あるが共に

金星の別名あり

雨候の事黄子發が相雨經ハ常以戊申日候日欲入時日上有冠雲

不問大小視四方黒者大雨青者小雨といハるより始諸書載する

所甚多一姑一二を左方ハ擧ぐ

武備志卷一百十八ハ海燕忽成羣而來主風雨鳥肚雨白肚風

海猪亂起主大風といハりこの海燕ハ胡燕の類あり觀文禽譜下

條ハ一種高須侯ノ裁圖ニ海中巖壁ニアル所ヲ畫ケリソノ形狀
頭臆蹙色ニ蛇頭ニ似タリ背及ビ翅黒ク翅最長シ翅ノ裏蹙色
嘴短ク尖微勾レリ口廣クノ中義楚六帖卷十七ハ攝大乘論
紅色脚蹙色ナリといハる者あり

天候

云少受猶如乞雨鳥西方有此鳥如此方鳩鵲等同と見えたるハ即
この類にて水乞鳥トハ異なり水乞鳥ハ廣東新語ヨ
物理小識卷二云熊公曰竈突發煙平遠望之亭々直上晴之候也蛇
涎而起如欲上而不得者雨徵也蓋雲將成雨空中气行皆成濕性煙
爲濕礙不得上升故至宛曲將雨礎潤將雨燈爆理可同觀朝日出尅
黯淡色倉白者雨徵也日出時雲多破漏日尅散射者雨徵也密雲四
布牛羊齒艸如常者不雨若啖食匆遽似求速飽雨徵也蠅蚋蚤蚤匆
邊啞食雨徵也蠅蝟之屬倉皇飛驚雨徵也穴處之蟲羣出于外雨徵
也下畧
天經或問卷二云如頭痒耳熱面赤髮潮體燥肢痛鳥雀翻飛噪空圍
舞魚出跳躍羣蟻出穴蚘過路蛇曝日石脉潤樹汗流琴聲不清鼓音
不亮燈燄搖閃燄爆有聲此皆風雨之先徵也

物産

利根川に産する魚鳥及び兩岸に生する草樹極めて多しその主
たる物江戸海に入る方ハ鯉を以て一銚子口の方ハ鱧魚を以て
すこの書余が郷里を先とするを以て爰は鱧魚を説きその餘の
物産ハ粗これをいふ
鱧魚ハ朝鮮名にして東醫寶鑑卷二十一に見え日觀要攷も鮭
魚と注せり鮭ハ和名鈔卷十九に載せたる鮭の誤にして本義ハ
フグなり山海經卷三赤鮭の郭注今サケノ非ずされど通用ニ
ハ鮭を用ゐるも可なりある儒者よりフグの可否を問ふとて鮭
の思ひて可と答へざるより如何とひやりハサケあり此醫
り困ミ一事人の能く知りたる食ひて中先哲或ハ鮓魚松魚過臘魚
さど書くるハ非なり又この魚功能多し粗左方は擧ぐ
無任法師雜談集卷三云聖武天皇東大寺御建立アツテ三面ノ僧
房ニ學問スル僧ヲ夜中ニ田舎ノ夫ノ形ニ御身ヲマツシ蓑キ給
ヒテ御覽シケルニ或僧アスヨリ後ハイカバスベキト歎キケリ

物産

サシノゾキテ何事ヲ御歎アルト問ヒ給ヘバ此日比鮭ノ頭ヲ舐
リ舐リシテ學問シツルガ舐リ盡シタリトイフナド、問ヒ給ヘ
バ鮭ハ目ノ眠ラレヌ物ニテ頭ヲ舐リ舐リシテ目ヲサマシテ學
問シツルト云ヒケリサテ越前ニ鮭庄トテ鮭トル庄御寄進アリ
ケリコレ學問ノ爲ナリ

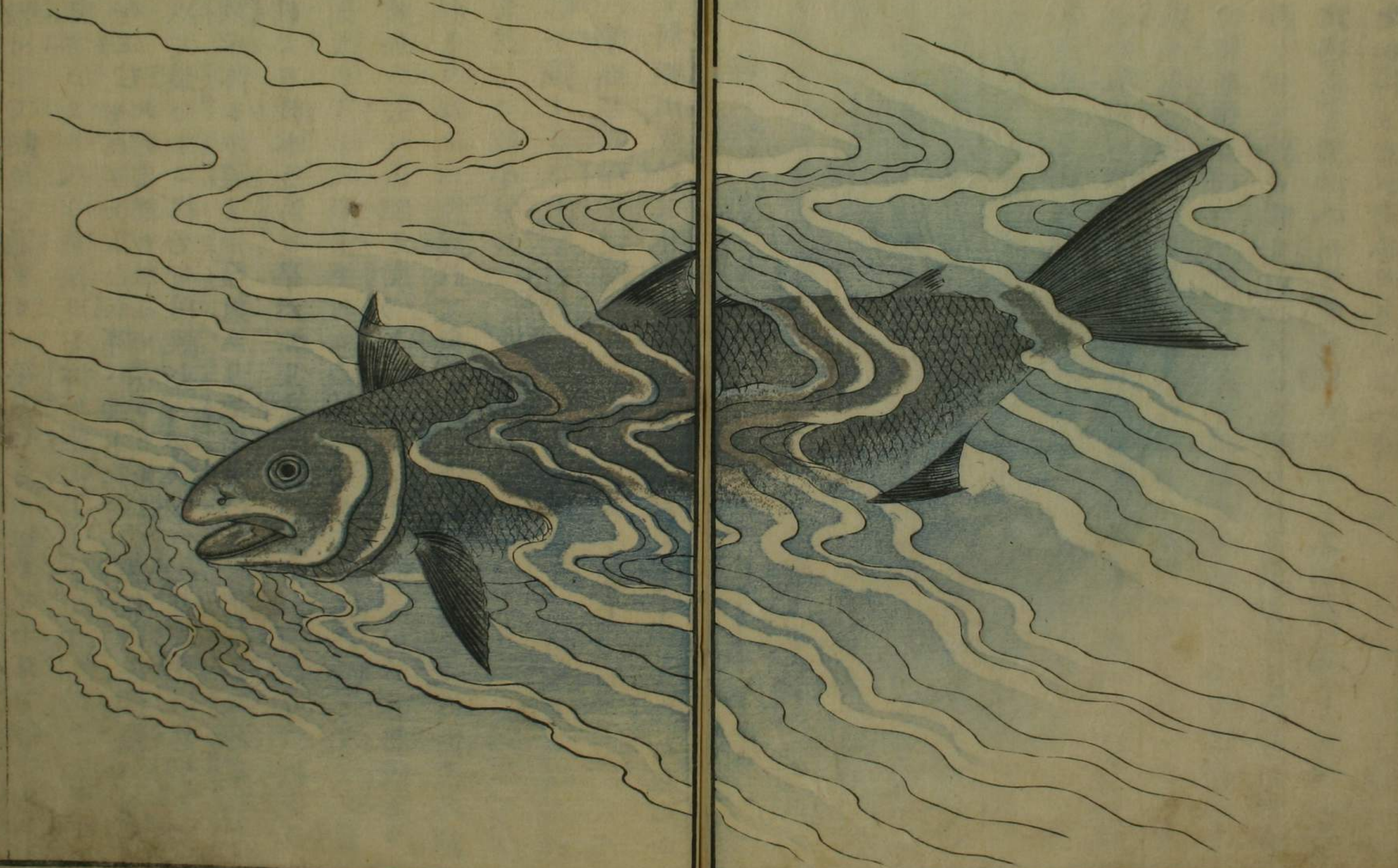
一本堂藥選下編云乾過臘魚溫體破瘀血治婦人腰冷血閉產後瘀
血諸疾發諸瘡瘍及衝氣結毒

又云此邦中古醫人必處過刺葛刺葛底等數品稱調血劑舉治衆疾
葛刺即乾過臘魚是也今也方法並失幾少識之者用者亦至稀只煮
食滿腹耳嗚呼其溫體破血之効迥在芎歸之上古人用之其有旨哉

和漢三才圖會卷四十八云產後金瘡藥 干鮭 阿羅魚共黑燒
存性
藜 萍蓬草 小角豆去皮
生用 沈香燒不
出煙 以上六味分量有口傳
松浦弘西海雜誌卷二云牛深湊ハ天草の西の果トテ南ハ薩州

長島と海上纜ト三里許を隔つ西ハ滄海渺茫トシテその限を知
りず予この處ト一宿を求めトその家の爐上ト何トも知れぬ
枯魚を梁より繩トてつりさげ煤ト黒トまるが見えざるを怪ミ
て主人ト問ひト一鮭ありト答ふるト所ハ漁者ト云ふト其
かくまで陳ク畜ヘおうる、事不審ありト云ふ主人曰くこの
濱ト鮭を得る事甚稀トシテ漸五年十年目ト一ツ二ツを捕ヘ得る
事ありそれを此の如く貯ヘ置く事ハ金瘡火傷の藥ト用ゐるお
りいか程年久き魚トても火トて炙れば油自湧出づるありこれ
を疵口ト塗傳るト効能神の如く痛を止め肉を生ず故トこの里
トて偶捕得る時ハ一尾を五軒十軒ト分畜ふるありト乃ト
おろさせて熟ク視るト北國トて漁りざる者と少ト異かる所お
ト北海邊トてハかゝる能ト聞クさりト西國ト來りてその奇
効を知得るハ奇ありト云ふト

物産



十

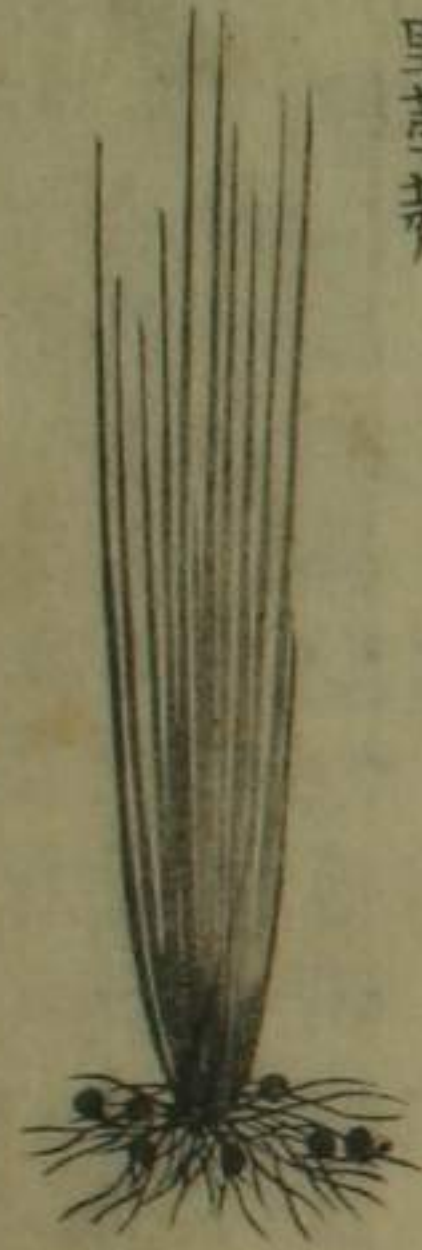
利根川にて鯉魚を漁するハ毎年七月下旬より十月下旬までか
り銚子口より入り利根川を沂さるり絹川きぬがわも分わかれ上り川上かみ至いたて
卵たまごを生うむ北きた越こ雪ゆき譜ふ初はつ編ひふいへるら鈴かね木き牧まき之のガ
を以もつて最さいとすこれを布ぬい川が鮭さけといふ銚子さし口くちより小見川せみ息いき栖すまで
ハ潮水うしほ沂さるる佐原さきはらも猶なほ鹽氣しほけあり故ゆゑその肉にく赤色あか薄うすく味あじ甚た劣たれり
これより淡水あまみづを沂さるる事こと六七里安食村やすけむら至いたて味佳あじよしありこれより
三里上りて小文間こぶんま至いたるこの間の漁いしを布川村ふがわむらの有あとすこの處ところ
鹽氣しほけ全ぜんく去きり魚肥いしほ之脂あぶらつき肉にく紅べに不なして臘脂ろうしの如ごとく味亦あじ冠かんり
これより以上ハ魚疲いしれて色味いろあじ益い減げず故ゆゑ味あじの美うつく悪あハ肉色にくいろの深ふか
淺あはを以もつてこれを分わかつ
これを漁いしするハ大網待網打切おほあみまちあみうちきり歩掛無相流あゆかけむさうりゅうイクリハバいナなビびキきこれ
等ハ網あみあり又また藉せきよて鍛たきてとるをヤスツキといふ
中下利根川ちゅうげりげんがわ不な於おて秋彼岸あきひがんの頃ころ鮭さけの登のぼりむとする不先ふまちて白

蛾が夥おほく羣ぐん上流かみ不向むかひて飛とぶ日出ひでて、後死のち一落ひとちて水面布すゐの
如ごとく此この如ごとき時ときハ當年あつねの漁いし多おほきをトとして盛さかし漁具いしぐを備そなふこの
蟲むし少すくき時ときハ獲とる亦また少すくしその形かたち蝶てふ不な似にて身長たか六む七なな分ぶ頭かぶ不な二ふた白しろ鬚ひげあ
り長なが五ご六ろく分ぶ尾び不な二ふた毛けあり長なが一寸いちゆん二三にさん分ぶ羽う左ひだり右みぎ并ならせて一寸いちゆん許ゆる白
色いろ柔な軟な綿わたの如ごとく卯時うし頃ころより出いて水面すゐ一尺いちせき許ゆるの上うへを飛とぶこの間
十日じゅうにち許ゆる鮭さけ登のぼる至いたて盡つくこれをサケムシといふ即すなはち和名わな鈔しやう卷まき十
九じゅうく不な蜻せみ唐韻たういん云い蜻せみ音誘おんゆう漢語かんご抄しやう朝あさ生なま暮くれ死し虫むし也なり藻鹽そうえん草くさ卷まき十二じふに云い蜻せみひ
ふ死しすとハオおあり白しろとといへる物もの不な一ひと名なアサガホあさがほ詩經しきやう名物なぶつ大坂おほさか解げ
毛け詩品しひんサケコさけこ越こ後ご寄よサケベツさけべつ同どうサカベツさかべつ夕ゆふ同どう越こ雪ゆき譜ふ
初はつ編ひふハツはつタたウうハ蝶てふの方かた言ことある由よしをハはり鮭さけ不な因よある蝶てふハはり
ああるかハツはつタたウうハ蝶てふの方かた言ことある由よしをハはり鮭さけ不な因よある蝶てふハはり
高たか誘ゆう注ちゆ云い朝あさ秀しゆ朝あさ生なま暮くれ之の蟲むし也なり水みづ上うへ似に蠶さ一ひと名な孝かう母ぼ海うみ南なん朝あさ
之の蟲むし邪じやニにの文ぶん爾に雅や雅や翼よく卷まき二ふた五ご之の蟬せみ條じょう不な引ひきて下した不な則すなはち亦また南なん朝あさ
とと苗なほ者もの云い云いハはりさされれ如ごとく蠶さ本ほん草綱そうかう目め不な混まじりハはりり誤ごありり朝あさ苗なほハはりり

物産

士

野葶薺



來り又用捨箱下卷ふ夏の夕
 壺靛の花の中よ顔の夕
 畧蝗を顔ふ盛と坂東の原ハ
 か井別當の盛と坂東の原ハ
 長實盛と當の盛と坂東の原ハ
 一入ハ非終隱の諸國の松より
 當今ハ非終隱の諸國の松より
 俗語近イテ麻古國の松より
 縣事崩タリ顔別當ハ陽春
 志の崩タリ顔別當ハ陽春

本草啓蒙卷十四云 蕈菌 芝タケ 信州ヨシケ 蕈後



色葉字類抄云蕈 草名可為雨衣

蜻蛉



嘉永五年壬子六月廿二日出の並余河畔於て蜻蛉の流此
 來る者尻小蛻殻あるを見り即石燈燈座類本草下巻に和
 國伊佐巳元之余分齋にてイタジリといふ物にて此が化生せり
 事疑ふ

越後ハカベツタウ考サカベツタウ
 といハ事ハ物類の呼巻四カ蝶を越後
 不ハ事ハ物類の呼巻四カ蝶を越後
 之ハ事ハ物類の呼巻四カ蝶を越後
 當ハ事ハ物類の呼巻四カ蝶を越後
 同ハ事ハ物類の呼巻四カ蝶を越後
 別ハ事ハ物類の呼巻四カ蝶を越後
 菓ハ事ハ物類の呼巻四カ蝶を越後
 庭ハ事ハ物類の呼巻四カ蝶を越後

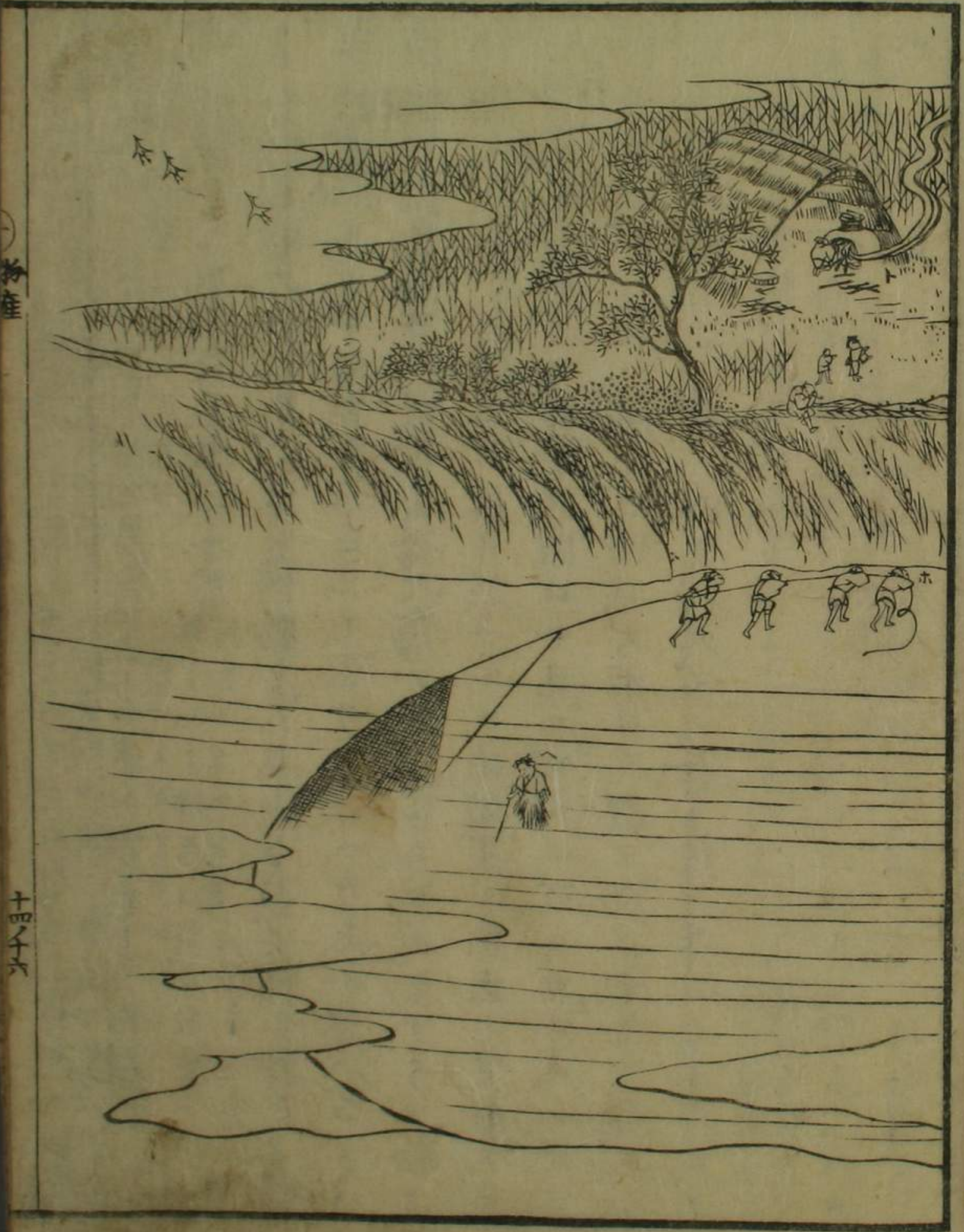
鱈魚



蕈絲廷

子道遊篇不朝菌不知晦朔也
の事とて此云不知晦朔也
知者失之矣若草木無知之物何須言不知也訓為芝母上蟲邪
菌者失之矣若草木無知之物何須言不知也訓為芝母上蟲邪
白露蟲卷廿五霞姑霞とせ能改齋漫録の誤を正す
一書不この蟲出づる時速舟を乗出さし中ふて藁火を焼く
時ハ悉くこれ不聚り羽を焼かれて落つるを採りて香餌と爲す
時ハ魚多く得りるといへり
鯉魚の漁始まる時ハ鴨跖草雞兒腸の花兩岸を點綴して秋間の
美景と稱する不足れりこの他動植の記載すべき者甚多
ヨシタケ蘆を刈りたる濕地の芟株不生ず乾地ハ生せず蓋狀
獨立色白一或ハ黄を帯び或ハ微黒を帯ぶる事あり四月多く生
む味朴樹菌の如し又乾して貯ふる者あり即本草の萑菌あり
ヲギかれど散文にて按ずるに説文卷二不矣菌矣地萑叢生田中
通ハ一ハふとのう
从ハ六聲とある文の繫傳不從中者象三菌叢生也易夬卦曰苒陸

夬夬陸即矣也與苒皆爲柔脆之物陸字從此といへるハかゝる物
不してさる處の漸固まりて平地とあるから不陸字これ不ハ
るあるべし陸ハ説文二十六不土塊陸陸也といひ陸ハ同二十八
不高平地と注せると漸不成固まる狀不因れる者又四月頃蘆
ふありざるを刈り積みて田に培せむとする者雨ふ朽ち難
が上ふ生ずこれハ色味全く同じれども朽ち易く貯へ難し
惠具は古より説々有りて詳ならずこ、不井ゴといふ草黒白二
種有り白井ゴハ野茨菰の小ある者その根ハ蒼くして食ふべし
りすされどその葉ハ食ふべき狀ありさらハ惠具ハ蕨の義ある
う黒井ゴハ烏芋の小ある者即救荒野譜卷上の野芋齊あり
卷八の水豆兒ハこれ亦二種有り水氣多きを米井ゴといひ少き
を糲井ゴといふ共に味甘し
小々妻芽に似て小あり原野濕地ハ生ず葉中不脊あり長三尺許
秋枯る採りて糲まざる製る一名廿、三ノ
大和本
草卷九
即爾雅義疏



鯉魚大網の圖

網を舟に積み積入高入船頭に幾丈網打大率
 空人かて舟を走りせ川せり網を打廻りよりさけを
 岸か治ひて下り川下せり知らし傍の砂をか引きあらし
 るより網長と十間より百間に至り幅八九尺より丈に至る
 此は川の浅深廣狭に従ひなり

1魚屋網元
 する是なり
 二代に網を纏ひて引くなり

ハ網船
 口は盛原の中かすり入り行を通
 水網を挽き畢て後或ハ網中に
 取してさけを打つ
 ハ手に棒を持ち網をかかりたる
 の頭を打つ
 ト食を調ふ小屋

の時多く上る形銀魚の如くにして下喙尖り長し身長六七寸喙一寸許銀光あり脊骨黒く見ゆ八丈島にてフツチといふも是かるべし

カッパといふ物本草綱目の水虎附録 溪鬼蟲ありといへど正しく當れりとも見えず逸周書王會解不穢人前兒良夷在子とある文の注不ハ在子ハ鼈身人首脂其腹多之霍則鳴曰在子といへる物やそれるむをハハとまれかくまれ望海毎談不刀祢川ふ子、コトといへる河伯あり年々ふその居る所變る所の者どもその變りて居る所を知るその居る所不てハ人々も禍ありといへりげふカッパの害ある談多し牛山活套中巻不筑紫ノ方ニハ河伯ノ邪祟多シ金銀花ノ煎湯ヲ用井テ神効アリといへり試むべし

手指を截断しざるを接ぐ藥の方をカッパより受けるといふ事いかでと思ひしが若ハさる事とや有らむ一事左に記す堅瓠廣



集卷六云。耳談。黃陂江尉解銀赴京。遇盜截去二指。抵京已五日矣。延醫。但求已痛。有仇總戎門下醫人曰。是可續也。斷指幸為從人拾得。即取合之。層々塗藥。仍夾以薄板。戒三七日勿近水。及期果合。屈伸如故。但有紅線痕。傾索得三十金。酬之。兼有其方。用片腦象牙末降香諸料。かゝるさまの事ども求め出づるふもふ不

おもふ事利根の川あるくへりゆへん草よひとくさず
みちのくはと不ーときくをいふればこの事をいいてーのふや

